

# わが国におけるサーバの2017年度出荷実績、及び、ITユーザトレンドを発表

ITプラットフォーム事業委員会では、サーバ及びネットワークストレージ製品に加え、ネットワークやミドルウェアも含めたITプラットフォームに活動の場を広げ、調査研究と関連市場拡大に向けた提言を行うことを目的に、活動を推進しております。

2017年度（2017年4月～2018年3月）の出荷実績を取り纏め、この実績発表とともに、IoT/AI等を含めた最近のITプラットフォームの国内市場動向の調査結果を報告すべく記者懇談会（5月30日（水））を開催致しました。主な報告内容を紹介します。

## 1.2017年度 総出荷実績

需要の中心であるIAサーバは、金額で下半期は前年並みを維持したが、年度では対前年度を下回り、UNIXサーバは、金額で上半期は前年増となったが、年度では対前年度を下回りました。また、メインフレームコンピュータは金額で対前年増となりました。

（単位：台、百万円）

総出荷		平成29年度上半期		平成29年度下半期		平成29年度	
		台数	前年比	台数	前年比	金額	前年度比
IAサーバ	台数	123,484	93%	141,959	92%	265,443	93%
	金額	87,843	93%	107,451	100%	195,294	97%
UNIXサーバ	台数	1,887	92%	1,872	86%	3,759	89%
	金額	23,531	111%	22,131	87%	45,662	98%
メインフレームコンピュータ	台数	124	114%	95	80%	219	96%
	金額	22,694	190%	16,400	84%	39,094	124%
独自OSサーバ他	台数	162	93%	214	101%	376	97%
	金額	1,499	114%	1,764	118%	3,263	116%

## 2.2018年度以降見通しについて

国内経済は、2020年に向けたインフラ投資やセキュリティ対応強化、大企業を中心とした好業績などで需要拡大の兆しが見えています。今後は、IoTの進展によるビッグデータの高速処理・解析、人工知能(AI)を取り込んだ新たな価値創造の動きなど、サイバーフィジカルシステム社会への対応が求められている。これらの動きに対応したITプラットフォームの導入が期待できます。

このような市場環境において、下記の分野・領域においてサーバ需要の拡大が見込まれます。

- クラウドを活用したシステム・サービスの拡大に対応するデータセンター構築・増強。
- IoTの浸透によるネットワーク接続デバイスやデータの増加など市場変化への対応。
- ビッグデータの高速解析や機械学習による新たな価値創造への取り組み。
- 社会や市場からの要請による、高度なサイバーセキュリティへの対応。
- システム運用効率化に向けたサーバ統合・仮想化からシステム統合への取り組み拡大。
- 企業内ユーザー部門での利用拡大に伴う新たなサーバの導入。
- 働き方改革に伴う、業務自動化(RPA)などのITを活用した企業の生産性向上に向けた取り組み。

（注）RPA：Robotic Process Automationロボットによる業務自動化



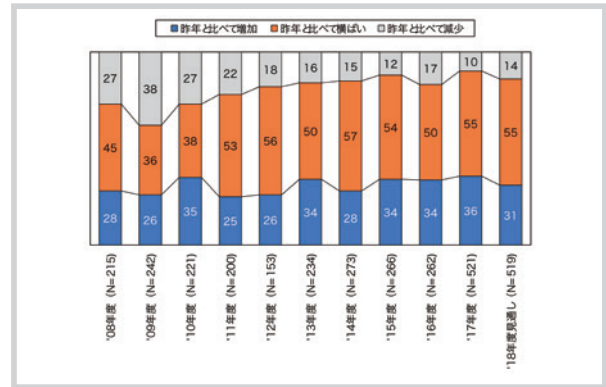
サーバ市場は、国内の企業ユーザーにおける効率投資追求による投資抑制や、サーバ統合・仮想化のさらなる進展の影響で減速となりましたが、今後は、上記領域のプラス要因の浸透と、データセンターへの集中投資などにより、需要確保が期待できます。IAサーバは、幅広い用途で今後も需要の中心となるが見込まれるが、市場環境や技術動向によっては、需要に影響を与えることも想定されます。UNIXサーバは、企業の基幹システムを担う需要はあるが、IAサーバへの需要分散等もあり、減少が予想されます。メインフレームは、高度の信頼性を要求される社会インフラシステムの中核で、今後も一定の需要が見込まれます。

### 3.ITユーザートレンド2017/市場動向調査について

当事業委員会では、IT投資動向を始め、注力分野、ITプラットフォームの構築状況等のIT活用トレンドを捉える調査研究を1998年から実施してきました。本年度は、「ITユーザートレンド2017/ビッグデータ・クラウド取り組み動向調査」と題し報告書を発行致しました。  
(<https://www.jeita.or.jp/cgi-bin/public/detail.cgi?id=700&cateid=6>) 前年度の305社から526社へと調査会社が増加しており、記者懇談会ではこの内容を一部抜粋し報告しております。

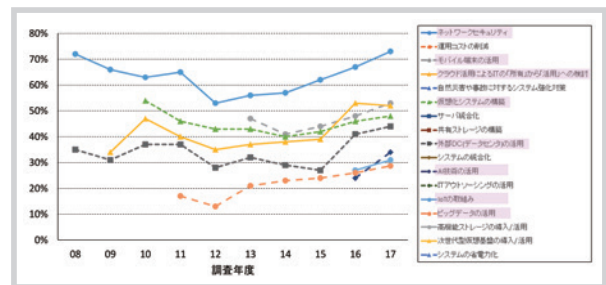
#### ①需要動向<IT投資スタンスと投資予算推移>

IT投資動向のこれまでの推移をみると、「昨年と比べて増加した」は、前回、前々回は34%で推移していたが、今回の調査では36%となり、2005～2007年調査に次ぐ、高水準となりました。また、「昨年と比べて減少した」は、これまでの調査で最も低い10%であり、今年度は、近年にないほど、IT投資が活発になったことが本調査から明らかになりました。



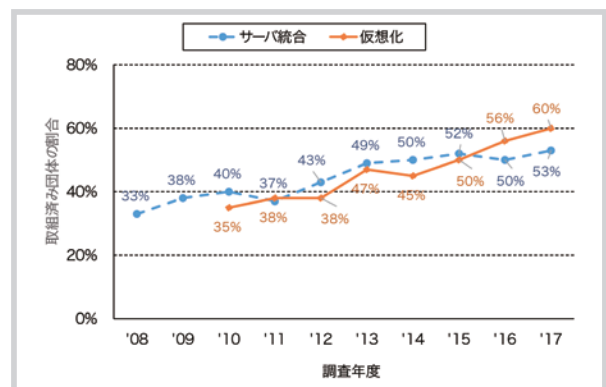
#### ②IT化関連テーマの注目度(10年間の推移)

「ネットワークセキュリティ」、「モバイル端末の活用」、「クラウド活用」、「仮想化システムの構築」、「外部DCの活用」、「ビッグデータの活用」、「AI技術の活用」、「IoTの取り組み」が数年注目度上昇しています。



#### ③サーバ統合、仮想化取り組み推移

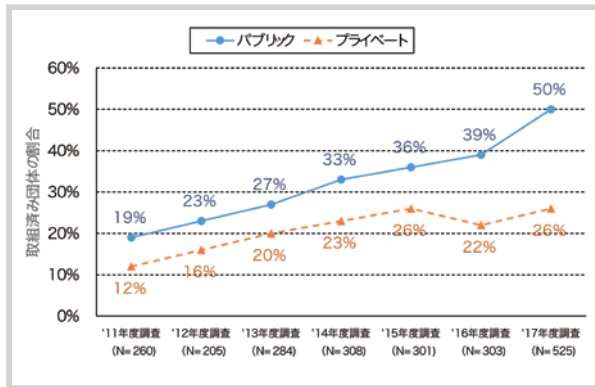
サーバ統合は5割、仮想化は6割の取り組みとなっています。4～5割が取り組んでいないが、これは規模の小さい企業ほど、その傾向にあります。





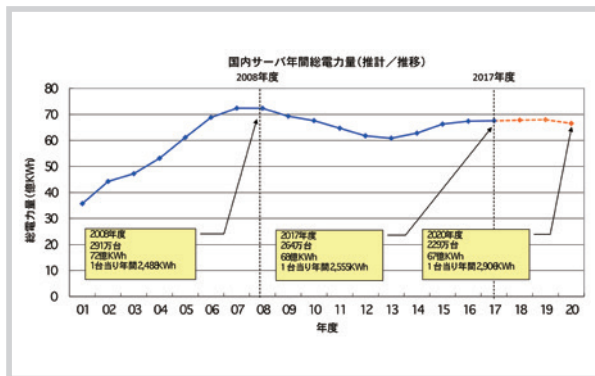
### ④クラウドサービスの利用状況

パブリック、プライベートともに年々利用率は増加しています。



### 4.サーバの年間総消費電力量に関する試算について

当事業委員会の傘下に設置したITプラットフォーム事業委員会（プラットフォームグリーンIT専門委員会）では、自主統計発表しているサーバ出荷台数と、省エネルギー効率化把握のために求めているサーバ定格電力を基準として、サーバの年間総消費電力量の推定値をまとめています。今回、2001年度から2017年度までのサーバ出荷台数に基づく推定値と、2020年度までの予測値をまとめました。2017年度は68億kwhの試算結果と



年度	01	02	03	04	05	06	07	08	09	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
総電力量 (億KWh)	36	44	47	53	61	69	72	72	69	68	65	62	61	63	66	67	68	68	68	67
稼働台数 (万台)	164	180	197	217	241	261	278	291	296	297	295	289	288	285	283	275	264	252	240	229

なり、2016年度と比べると、1億kwh微増となりましたが、2008年度(72億kwh)を最大として、減少傾向となっています。なお、1台当りの年間消費電力量は増える傾向にあります。これは、IAサーバの中位機クラスが仮想化用途で高機能化して、平均定格電力が大きくなっているためと推定されます。ただし、稼働台数が減少傾向にあるため、今後の総電力量は横ばいから減少に転じると推定されます。



記者懇談会会場の様子